

要介護高齢者が安全、容易、確実に着脱できる新しい義歯製作法の技工臨床実習への導入

野村 章子（明倫短期大学 歯科技工士学科）

1. 補助事業の取組状況

一般に部分床義歯の製作工程で、クラスプ形態は設計時に決定される。しかし、その手法では要介護高齢者にとって使い易い義歯を提供するとは限らない。超高齢化社会の要請に対応できるように、要介護高齢者の口腔機能の改善に加えて、安全、容易、確実に着脱できる義歯を製作する新たな手法を確立し、臨床実習に導入することを本研究の目的とした。

研究の遂行のために、デジタルビデオデータ処理用パーソナルコンピュータ（Z cosmos社ZP74-3000M）および編集用ソフト（Adobe社Premiere Pro）を購入した。

本学附属歯科診療所に来院した51歳から86歳までの健常高齢者11名と86歳の片麻痺高齢者1名を対象に、義歯着脱時の義歯着脱状況についてデジタルビデオカメラで撮影し、同時に問診も行った。撮影と問診、画

像編集は2名の歯科技工士が担当し、撮影方法、義歯の補綴部位、クラスプの種類や形態、義歯の持ち方と着脱方法についての比較検討は本研究担当者全員（歯科医師1名、歯科技工士3名）で行った。

2. 補助事業の成果

1) WINDOWS PC使用でのDVD編集と出力方法の習得が可能となり、他の研究者とのデータのやりとりが容易となった。

2) 歯科技工士学科の有床義歯技工学の臨床実習で、健常高齢者の義歯着脱に関する臨場感のある詳細な説明が可能となり、歯科技工士教育に重要である歯科医療の実際について理解を深めることができた。

3) 義歯着脱の主観的評価や手指の可動範囲などから着脱状況の問題点を抽出し、その解決法を検討するための基盤が確立できた。

歯科技工技術向上のための手指訓練法の開発

丸山 満（明倫短期大学 歯科技工士学科）

1. 補助事業の取組状況

歯科技工士にとって指先の技術は欠かせない要件である。技術は感覚、特に触覚、視覚に依存する。それらを向上するためには、何らかの方法で繊細な感覚を身につける必要がある。しかし、従来の技工技術教育は主に技工物の反復作業によって行われているため、学生個々の技術習得度に大きな差があり、教育の進捗上問題をもたらしている。

そこで、本研究は、あらかじめ所定の技術水準に到達するために、手指・指頭の動きや感覚の基礎訓練を行い、歯科技工技術教育の効率化に向けて企画した。

初年度は本学学生の器用さについて現状を調査するために、使用する器具の検討を行い、手指の感覚を向上させるために教育方法の改善に向けて実験を行った。

2. 補助事業の成果

指先の器用さ及び指頭の感覚向上のための訓練法を確立するために、被験者として本学学生を選び、同意のもと器用さのベースラインの設定を目的として予備実験を行った。

1) 手腕作業検査盤と指先器用検査盤を用い、前者15秒、後者30秒におけるペグの移動数によって手腕と指先の器用さを評価した。

2) 大小分類検査を用い、大小5種類、各10個合計50個のメダルを規格化したスリットを通過させるのに要した時間によって大きさによる弁別作業能力を評価した。

3) 重量弁別試験を用い、50～60gを2g間隔の同じ大きさの黒色の円盤状錘6種を用い重量の軽い順番に並べることにより重さによる弁別能を評価した。

上記の実験結果ふまえ、指頭の感覚向上のための訓練法について検討を行い、器用さを向上するための効果的な教育方法を確立する。

なお、この研究成果は16年度の歯科技工学会にて発表した。

初年度は、最終目標として教育方法確立のための機材と予備実験等の準備期間と位置づけたため、申請時の人件費支出については、次年度以降に繰り越す予定とする。